

河川伝統技術名称：

ちりく 千栗堤

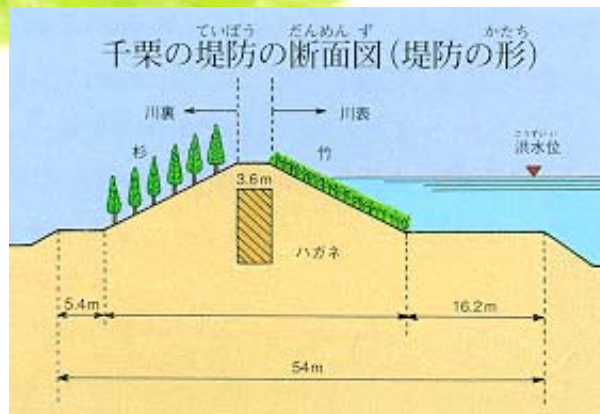
分類：二線堤 年代：17世紀代

河川名：筑後川

都道府県／地先：佐賀県／三根町他



千栗の堤防と記念碑



千栗の堤防の断面図

(堤防中心部にハガネと呼ばれる粘土を突き固めた層がある)

資料：「わたしたちの郷土・佐賀の開発につくした人」、H5.3、土木のイメージアップ連絡協議会

(概要) 佐賀県と福岡県の間を流れる筑後川は、昔から別の呼び名で、千年川または筑紫次郎ともいわれ、大昔から毎年のように洪水のため、大きな被害が出ていた。このため、^{なげとみひょうごしげやす}成富兵庫茂安公はこの筑後川の洪水から村や人々を守るため大きな堤防を造った。これが千栗の堤防と呼ばれるものである。千栗の堤防は現在の北茂安町千栗から三根町坂口のあたりまでつくられ、堤防の外側(川の方)には竹を植えつけ、堤防の内側(田んぼの方)には、杉の木を植えられた。堤防の中心部には、粘土をつきかためたハガネと呼ばれる層を入れ、水がもらないようにした。堤防の竹や杉は、治水機能のほか、他国との戦争のための材料として利用され、杉土居とも呼ばれた。この堤防築造には約12年かかったが、地元農民の暮らしを考え、彼らの仕事に支障が生じないように、長い年月をかけてつくったといわれる。この千栗の堤防が完成してから、洪水も減少し、人々の暮らしも大変楽になった。堤防ができてからおおよそ300年以上、周辺の人々の暮らしを守ってきた。その後、現在の堤防が築造され、千栗の堤防は一部を残し、ほとんどなくなった。